

「考えよう！親の子へのかかわり方を」

—新しい時代のしつけ—

野田俊作（大阪）

要旨

キーワード：

こんにちは。今日は子育て、育児の話をいたします。

子育てなんていうのは、皆さん、育てられたであろうと思うし、これから育てられるかたもあろうと思うし、育て終わったかたもあろうと思うのです。私も育て終わりました、いちばん下の子が、もう 24 歳になりますので、育児卒業であまり興味がなくなってしまったので、なるべく育児の話は勘弁してねと言っていると、ちょうどこんな話が来まして、しょうがないからやりましょうかということになりました。

先ほどご紹介いただきましたように、アドラー心理学というのを勉強してきたのですが、アドラー心理学というのは、代々といますか、アドラーさんが生きていたころから 40～50 年間、「独裁的育児」に反対してきたのです。「独裁的」とは、ぼくはよく「ファシズム的」と言うのですが、なるべく汚い言葉でののしったほうが印象的だろうと思うので、独裁的 (autocratic) な育児というのに反対をしてやってきました。

独裁的育児とは、結局、親が全部決めるということが一つです。それから、その子どもに従わせるために、賞や罰を使うということ。罰だけではなくて賞も、特に金銭や物などで釣るようなタイプの育児を、独裁的とアドラーは言ってきました。それに対抗するために、アドラー自身は、あまりこの言葉を使わなかったのですが、アドラーの生徒たちは、民主的 (デモクラティック) という言葉を使って、その民主的な育児をしないとイケない。親が全部決めるのではなくて、その子どもとの話し合いの中で決めていこうということ。それから、賞や罰、特に罰を使わないで、代わりに、その子ども自身に自分の決定したことの結末を体験してもらって、そこから学んでもらおうということ。あるいは、みんなが納得するようなルールを作って、そのルールにのっとって家族を運営しようということ。それから、子どもの悪い側面というか、不適切な側面ではなくて、よい側面に絶えず注目しようということを大変強調してやってきたつもりでした。大体 1950 年代、1960 年代ですから、今から半世紀ほど前に、アメリカでアドラー心理学に基づく育児の本がたくさん書かれました。その中に、そういうことがいっぱい書いてありました。

ところが、情勢が変わったと思うのです。私もそう思いますし、アメリカのアドラー派の人もそう思っているようですが、大体 1970 年代か 1980 年代ぐらいから、我々の敵は独裁的育児ではなくて、無政府主義的育児だ、放任的育児だ、何も子育てしていないのが問題だという感じが強烈にしてきたのです。それは、例えば我々が街の中を歩いていて、そう思いませんか。一ぺんも

しつけを受けたことのない子どもが、目の前にいっぱい歩いているのではないですか（笑）。電車の中で、隣に座ってマクドナルドのフライドポテトを食べるのです。あれは臭いですね。自分が食べるのはいいけれど、他人にそばで食べられたら、かないません。私は、先ほどご紹介いただきましたように、戦後早く生まれまして、割と古いタイプのしつけを受けたと思うので、電車の中で物を食べるのは基本的にいけないことだと子ども時代に言われました。お菓子であっても何であっても、物を食べてはいけないはずなのです。このごろは何か電車の中で、車座に座ってパーティをしている子がいます、この子たちはしつけを受けていないのだと思います。

そんなことから始まって、基本的な生活習慣というか、礼儀作法を学んだことがない子どもたちがいる。その子たちに時々、「なんでそんなことするの」「そんなことしちゃいけないんじゃない？」などと言ってみます。よその子には、私もさすがにめったに言いません。時々言うのですが。この間などは、喫茶店に入ったら砂糖つぼをかき回している子どもがいたので、ちょっと言いました（笑）。「それはね」と言って。お母さんが向こうで知らん顔しているのですが、おじさんが説教しているので、あきれていました。

私の親戚の子どもなどに時々言うと、彼らはこう言うのです。「だれにも迷惑をかけていないから、いいのではないか」と。「ああ、これなのだ」と思います。これがその無政府主義的、アナキズム的、放任的育児の成果なのだと思うのです。

日本にアドラー心理学が入ってきたのは、私は 82 年にアメリカに行きましたが、その前から、STEP (Systematic Training for Effective Parenting) という名前の、アメリカでできた、アドラー派の人が作った育児プログラムが入っていました。それ以後もいろいろな種類で、育児プログラム、育児のグループ、カウンセリングという形で、アドラーの育児が入ったのですが、今になって反省するに、それはそういう無政府主義的な育児、しつけのない育児の口実に使われてしまった。「これはアドラーだからいいのよ」と言って、何も子どもに教えないことが、理論武装されてしまった。まずかったかと、すごく 90 年代の中ごろに反省したのです。

実際にそういう事件がある地方でありました。いま、日本の国で一県だけ、教育委員会がアドラー心理学を禁止している県があるのです。禁止されるだなんて有名になったものだと思って、うれしいのですが（笑）。それは、ある中学校の担任の先生が、地域の UHF テレビの取材を受けたのです。その先生は、自称「アドラー心理学クラスルーム運営」をやっている。そのクラスは、例えば居眠りをしている子や、後ろのほうへ行行って立って歩いている子がいるのです。その先生は、あれはかまわないのだと言うわけです。「そのクラスの共同体に対して破壊的な行動をしていないし、ああやって学ばないで損をするのは本人だけだから、全然かまわないのです。これがアドラー心理学です」とテレビで言ったものだから、教育委員会がむかつきまして、アドラー心理学の学習を禁止すると言ったのです。

これはアドラー心理学の正しい理解とは違うと思うのです。アルフレッド・アドラーという人は、何とか子どもたちに、この社会での暮らし方、生き方、基本的なマナー、ルールというか、方法を教えたかった人なのです。それは、あるアメリカの人が言っているのですが、ロジャースというアメリカの有名なカウンセラーがいます。ロジャースはアメリカ人で、トウモロコシ農家の息子で、トウモロコシというのは、水をやって日に当てておけば、ちゃんと実を結ぶ。だから、人間もそれと同じだと思って、受容と共感さえしていればりっぱに育つと思っている。

しかし、アドラー派は違う。アドラーは、ウィーンの下町の悪がき仲間の中で育ったのです。悪がきというのは、仲間のルールを守らないと、しかとされてしまって、仲間に入れてもらえないではないですか。だから、アドラーの基本的人間観は、この世の中には仕組み（システム）が

あって、そこにはルールがあって、人にはすべきことと、してはいけないことがある。それを、その次の世代に、きちんと伝達していかないといけない。この点は、アドラーの時代には、あまりにも当たり前だから、彼は言わなかったのです。しかし、そのうち、それが当たり前ではなくなったのです。

日本の場合は、特別な事情があります。第2次世界大戦に負けまして、私が小学校、中学校におりましたころの担任の先生たちは、戦前の学校教育を受けておられて、戦争前の価値観に対して、すごく大きな疑問を持っておられて、それをぼくらに教えることに戸惑いがあったのです。我々の親もそうだったと思うのですが、あまり人としてこうすべきだとか、してはならないということを、強く前面に押し出されなかった気がするのです。そこで育ってきた子どもたちが、やがてちょうど80年代ぐらいに親になるわけです。

1945年に戦争が終わりますから、戦後生まれた子どもたちというのは、1980年で35歳です。その子どもたちがいたとしたら、もう小学校へ行くころになっているではないですか。これが、全く何も学んでいない親から育った、第2世代の純粋培養の、全く何も学んでない子どもの第1世代です。その子どもたちがあふれてきたけれども、日本だけかと思ったら、違うのです。あるフランスの本を読んでいると、フランスでも、やはり80年代ぐらいから、どうしようもないぐらいしつけを受けていない子どもが問題になり始めています。アメリカが問題になっているのは、テレビのさまざまな報道でご存じのとおりです。機関銃をぶっ放すやつなど、とんでもないのがいっぱい出てきているのが、やはり80年代という時代に最初、出始めているかなという感じがするのです。

なぜ、80年代なのかよく分からないのです。神様のなさることは我々にはよく分かりませんが、学者というのは、ここで一発何か書かないと飯の種にならないから（笑）、うそかもしれないけれど、考えてみると、やはり一つは、お金持ちになったからだと思います。我々は、食べるために働くという切実感が、割となくなってしまったのです。生活必需品は一応あって、それでぼくらが働いてお金が欲しいのは、生活必需品ではないものです。携帯電話の新しいものやデジカメなどが欲しかったり、新しい洋服が欲しかったりするのです、働いているではないですか。だから、絶対的にはお金持ちなのです。ただ、隣と比べると、相対的貧乏かもしれないです。その時代に子どもたちが育つと、その子どもたちも欠乏がないから、わがままして、あれ買ってこれ買ってこれと言っても、ある程度買ってやれるわけです。こうやって、溺愛的に育てることができるようになりました。

昔も、溺愛的に育てられた人はいました。大金持ちの息子さん、娘さん、お殿様のところのお姫様、若様などは、溺愛的に育てられましたが、大体お殿様のところは、三代め、四代めになると、だんだん質が落ちてきまして、徳川将軍家でも、最初三代めぐらいまでは賢いのですが、四代めぐらいから、だんだん何だろなという人になる。それで五代めぐらいになると、訳の分からないことをするではないですか。そういうので溺愛して、欲求不満なしに、何でも欲しいものを与えて育つと、わがまま放題な人になるというのは、歴史的に証明されていて、それが今、全日本で起こっています。

私の亡くなった父親がよく言っていました。「おまえ、知ってるか。うちの家なんぞは、うちのご先祖様のだれよりもいいものを毎日食っている。朝も昼も晩も、お祭りみたいな、正月みたいなものを毎日毎日食っているんだぞ」と言っていました。本当にそうです。本当にぜいたくな暮らしをして、それが当たり前の中へ子どもたちが生まれてきて、これは一つ、やはりあるべしと思います。それを「溺愛型放任」と言っているのですが、子どもたちの求めるものを、何で

もかんでも無差別にあげてしまう放任型の育児を一つ作っているだろうということです。

それから、もう一つ、「子捨て型放任」もありそうに思うのです。親の愛情というか、注目、サービス、エネルギーを全然もらっていない子どもたち。これは昔からいました。お父ちゃんは、国立の別荘を出たり入ったりして、お母ちゃんは水商売か何かで忙しくて、子どもを見ている暇など全然なくて、子どもは完全に自治社会で生きていたという子どもがいました。家庭裁判所などに行っていたときには、よくそういう子と出会いました。

このごろのはそうではなくて、一応ご両親がご健在で、普通の職業に就いておられるのですが、昔から日本のお父さんは会社に全勢力を集中しまして、大体、日本の社会構造は共同体というか仲間というか、コミュニティ、会社であって、そこから家庭へお仕事に嫌々出勤していくのです。夜の間はお勤めで家において、それで朝意気揚々と会社へ帰っていくと、こういう構造ではないですか。

お父さんは昔からそうだったのですが、今度、お母さんもだんだんそうやってきたのです。いわゆる女性の社会的自立ということがあって、これはぼくはいいことだと思うのです。決して、ぼくは女性の社会的自立反対論者ではないのですが、女のかたがたが、例えばお仕事や、お仕事ではなくても、趣味でもスポーツでもいいですが、そういうものに大変大きな生きがいを見いだされるようになった。そうすると、育児や家事が何となく劣った職業のように思われているのです。「専業主婦です」と言うだけで、何となく劣等感を持つような感じが漂ったりする。育児に熱心だったりすると、「あの人、古いわね」「あんた、そんなことでいいの?」と言われてたりもするし、言われなくても、自分でもこれでいいのかなと思ったりするのです。できるだけ保育所へ入れて、また勤めに行きたいと思う。それで0歳保育から入れて、勤めに行ったりするわけです。帰ってきたら、お父さんも会社にエネルギーを吸い取られて、疲労こんぱい。お母さんも会社にエネルギーを吸い取られて疲労こんぱいで、子どもに向かうエネルギーがないのです。

これは、ぼくは意外と気がつかないことだと、自分の体験で思うのです。私の子どもの一人が、英語があまりよく分からなくて、「お父さん、英語見てよ」と言うのです。「いいよ」と気軽に引き受けたのです。ぼくは、英語はあまり不得意感がないので、見てあげるけれど、ではいつ見ようかと、子どもとスケジュール調整をしたら、時間が取れないのです。向こうのスケジュールと、こちらのスケジュールがあって、例えば1週間に2回、1時間半ずつ、2時間ずつという時間が、子どもとの間に取れないことが分かったのです。このとき、ぼくはがく然としたのです。

私は、いつもはただ何となくご飯を食べたり、おはようを言ったり、おやすみを言っているから、子どもと一緒にいるように思うけれども、例えば週に2回、1時間ずつの時間が子どもと一緒に取れないというのは、一種、異常事態です。こんなのは言い訳になるかどうか分かりませんが、私は男親ですけれど、ひょっとしたら女親もこれかもしれない。女性だって、週に2時間、1時間ずつ2回、子どもとじっくりお勉強を見てあげる時間が本当に取れるかということ、取れなかったりするかもしれないのです。どうも現代の文明というのは、我々をだんだん忙しくしてくれていて、子どもに向かう時間が少なくなる。それで、今では昔と違って、普通の家庭で子捨てが結果的に起こってしまうのです。

親は、子どもを捨てている気はないのです。日本のだんなさんがたは、家族を捨てている気が全然なくて、「おれは、家族のために、こんなに汗水流して働いて、金を稼いでいるのではない

か」と言うではないですか。あれは実は家族を捨てているのですよ。確かに金は稼いでいるけれども、家族に向かってのエネルギーが全然ない。それを両親がやり始めて、意識としては「私はいつも家族のことを思っているし、家族のために生きているのだから」と言うけれども、子どもの側から見れば、お父ちゃんもお母ちゃんも外を向いていて、全然、自分のほうを向いていないわけです。そうすると子どもたちは、自治的に生きていく。何も学ばないで生きていきます。

この放任型の育児、無政府主義的な育児、アナーキズム型の育児が、80年代がもし第1世代だとすると、今、第2世代になりつつあるのです。その子どもたちが大人になって、育児について、あんなものだと思って育つわけです。お父さんもお母さんも、夢中になって外の世界にいて、自分たちは自分たちで好きなことをして遊んでいて、それで人間、体だけは大人になりますから、ちゃんと子どもが生めるようになって、子どもを生んで、さあ、どうしていいかわからないのです。何も学んでいないから。

子どもというのは、嫌ですね。ぼく、子どもが嫌いなのです。こうやって育児の話をしてみたり、育児のカウンセリングをしたりしているくせに、特に小さい子が嫌いなのです。何が嫌いかというと、あの子らは日本語がよく分かっていなくて、言って聞かせても、全然知らん顔で泣いたりするではないですか。中学生ぐらいになると好きなのです。大体、小学校5年生ぐらいから理屈をこねはじめて、ああ言えばこう言う、こう言えばああ言うではないですか。憎らしい。あれ、好きなのです。そういう年ごろになると、ようこそいらっしゃいで、幾らでもお友達になるのだけれども、それよりも前の子どもたちは苦手なのです。訳が分からないから。訳が分からないけれども、ぼくたちが育てるときには、ぼくたちが育てられました。

我々自身は、それなりに育児を受けました。何も教えてくれない親ではなかったです。むしろ教えすぎで、いささかうるさかったです。私は、山登りが趣味だと先ほど書いてありましたが、若いころ、高校生、大学生のころも山登りが好きだったのですが、父親に禁止されて、「山はいかん。山は死ぬ」と言うのです。そうかもしれないと、今は思います。うちの父親は開業医でしたので、せっかく医学部へ行って跡継ぎができたのに、死なれてはたまらないから、山はいかんと言う。「ああ、そうですか」と言って、山へは行きませんで、40を過ぎたころから、中高年登山者で、また登り始めました。今度はおやじ、何も言わなかったのです。なぜ何も言わないかというと、それなりに分別ができて、死ぬようなことはしないだろうなど。あれは、親は子どものことをよく知らないということですが、そう思っていたのでしょうか。

そんなふうで、私の行動にかなり干渉してきたし、「こうすべきだ」も言ったし、「こうすべきではない」も言われましたから、今度、子どもを育てるときにも同じように、親に言われたように、「こうすべきだ」も、「こうすべきではない」も言います。それで、それなりに、別にアドラー心理学を学ばなくても、ある程度は育つだろうと思うのだけれども、全くそういう体験がない。だから、一方では放任型子育て、子捨て型子育てを受けて、全然親と接触していない。全く自分たちだけで育ってきたような気がしている。それから、一方では溺愛型子育てで、辛抱するとか、我慢するとか、計画するというのが全然ない。目の前にある欲求不満は即、今、解決したい。そうやって大人になってしまって、子どもができたら、やはり困るだろうと思う。あの赤ん坊を抱えたら。全然言うことを聞かないし、壁へ投げつけたくなるだろうと、ちょっと共感してしまうのです。そこで、方法を知っていれば、そんなときどうすればいいかわかっていれば、そういう過激な手段に訴えなくて済むのです。

だから今日、「しつけ」という言葉を、ぼくはわざわざ選んでもらったのです。初めの題名は

違ったのです。「しつけ」という言葉は、多くの親たちが嫌がる言葉だと、ぼくは理解しているのです。何か「勇気づけ」などという題名を初め、言われたのですが、それはいけない。やはり今は「しつけ」やと（笑）。もう1回しつけというものを、がちっと考え直そう。ただし、あるアドラー派の学者が言ったのですが、子どもにしつけをするために、子どもを不快な目にあわせる必要は全くない。これがポイントなのです。今までしつけというのは、子どもに何かめに物を見せて、痛い目に遭わせて、それでしつけるとというのが基本原則みたいだったのです。それが基本的な間違いだった。

アドラー以来、我々はそうではなくて、子どもが納得してしつけられていくことを、どうすればいいかを考えてきたわけですから。そのためにどうしていったらいいかを、我々が考えてきたこと、あるいは私がやってきたことを、これから2〜3お話ししようと思います。

一つは、子どもも人間だということです。当たり前のことですが、我々と全く対等な人間だということです。私は、この世に生まれて50年余り生きて、いろいろなことがありました。学校も行って勉強もしましたし、遊びもしましたし、恋愛もしましたし、失恋もしましたし、結婚もしました。離婚までついでにしましたから、人生で味わうべき大抵のことを味わいました。その私の今までの一生は、説明できないのです。「野田さん、一体今までどのようにして生きてこられましたか」と言われたら、56年いただくと説明できるのです。56年分ありますから（笑）。それをしていると、今度56年たちますから、私は死にますし、説明できないのです。極めて個人的なというか、一回性のというか、私だけの人生だったではないですか。

子どもだってそうなのです。子どもは、私の子どもではないのです。お母さんの体から外へ出た途端に、別の一人の人で、もうその人独特の人生を、ぼくらに量り知れない人生を生きていつている一人の人間なのです。これはすごいことだと思いませんか。その一人の人間が今出発して、我々と一緒にしばらく暮らしてくれるのです。そのうち本当に出発して、行ってしまいます。それまでの大体20年という時間をぼくらと共に暮らして、その間にたくさんの思い出を作っていくのです。その子どもが、やがて私のところへ患者さんとして、お見えになって、「子ども時代、どんなことありましたか」「お父さんとお母さんがいつもけんかばかりして、私なんか、生まなればよかったと言ったのです」と言われたら、やはり嫌でしょう。ぼくらは、まずいことに彼らの思い出の登場人物なのです。そういうことは、「どんな生活でしたか」「お父さん、お母さんがいつも仲よくて、いつも私のことを考えてくれました」と言われたいではないですか。彼らの仲間、パートナー、伴侶、旅の仲間、一緒に生きていく人なのです。ぼくらが上で彼らが下だとか、ぼくらが導いて、彼らが従うなどという考え方は、あまりしないほうがいいと思う。

世の中が変わりまして、このごろ残念なことに、老人が尊敬されないのです。どうしてかという、科学技術の進歩が早すぎて、若い子のほうがよく知っているのです。私は意地っ張りの見栄っ張りです。娘たちがいるのですが、娘たちは2人ともコンピュータ屋なのです。理科系頭で、日本語ではなくて、C言語で考えているような人たちで、絶対あいつらに負けないぞと、まず決めてやっている。大体、彼らのレベルについていくようにしているけれども、これはすごく疲れるのです。普通の親はそんなことしない。そうすると、ばかにされるのです。「何だ、そんなこともできないの」「そんなのも知らないの」と言われてしまうではないですか。それはやはりむかつくでしょう。むかつくけれど、でもこれが、しょうがないのです。今の世の中は、技術の世の中、科学の世の中で、それがものすごい速度で進歩するから、ぼくたちには子どもたちが理解できないのです。彼らがどのように生きていくのか、どんな世の中を生きていくのか。どんな生活を送るのか、どんな結婚生活するのか。どうやって子どもを育てるのか、どんな職業に就くの

か。よく分からないと思いませんか。

1年ほど前に、1950年代に書かれたアメリカのSF小説を、いっぱい読んだのです。それも2000年から2010年ぐらいが舞台になっているものです。そうすると、面白いのです。何か月に都市があって、そこで生活していたりするのですが、主人公が公衆電話を探すのです。だから、SF作家自体、完全に予想は間違っていて、携帯電話などを考えた人はいなかった。インターネットも、もちろん考えた人はいなかった。だから、今から例えば40年後、50年後どうなるか、ぼくらが何を考えても全部間違っていると、あのとき思った。全然違う方向へ発達するでしょう。だから、子どもたちがどんな世界で暮らすか、ぼくらは分からないのです。

だから、ぼくらが教えることというのは、そういうレベルでは何もないのです。もっと根本的なことです。人と人が一緒に暮らしていくには、どんなことをしなければいけないか。相手の話をよく聞かなければいけないとか、人間は他人のことがテレパシーでピピッと分からないから、とにかく、何があってもじっくり話を聞いてみよう。それから、話を聞いて、こうなさい、ああしなさい、こうすればいいのよと結論を言うよりも、その子どもがどうしようとしているか、まず聞いてみるわけです。子どもが何かアイデアがあるのなら、そのアイデアでやってみてもらおうではないか。うまくいかないと思うかもしれないけれども、うまくいくかもしれないです。

アルフレッド・アドラーがこんなことを書いているのですが、アドラーにはクルトという息子さんがおられて、この人のことはあとでちょっと話しますが、その息子さんが、中学生ぐらいのころに、短波ラジオを組み立てたのだそうです。ウィーンに住んでいたのですが、ダイヤルを回して、「何をしようとしているの？」と聞いたら、「ロンドンのBBC放送を聞こうと思っている」と言ったのです。それでアドラーは、「子どもはかわいいな、そんなできもしないことをしようと思って」。途端に、ロンドンの放送が英語で入ってきた。だから、いつも子どものほうが進んでいるのです。

そういうときに、子どもにやらせることです。「そんなばかなことやめなさい」と言うより、ひよっとしたら、子どもの言うアイデアが正しいかもしれないのです。だから、まず子どもにアイデアがあるのなら、やってみよう。ないのなら、「ぼくたちだったらこうするな」というようなことでもって、要するに、対等の仲間として平等の関係を結びたいというのが、第一か条だと思ふのです。子どもとぼくたちが上下ではなくて、支配したり服従したり、保護したり保護されたりではなくて、一人の人間と一人の人間として、経験者と未熟な人という違いはあるかもしれない。経済的な力があつたり、経済的な力がなかったりするかもしれない。でも、そういう違いがあるからといって、不平等である必要はないと思ふのです。

それは、ちょうど男女の関係と同じで、私の祖母は、明治三十何年かに生まれた人ですが、男が上で女が下だと強く信じておりまして、男女平等と言ったら「そんなばかなこと言うんじゃないや」と怒ったのです。今は、男が上で女が下かで、皆さんがたは怒ります。今、大人が上で子どもが下という、だれも怒らないのだけれども、大人と子どもが完全に平等と言うと「そんなばかなことはありません」と怒るのです。それは、男女の関係と同じで、偏見だと思ふのです。では、その50年前か60年前かに、男女が平等でなかった時代から、今、男女が平等になった時代に、その男や女が本質的に何か変わったかということ、変わっていないのです。やはり、女の方はスカートをはいているし、男の方はスカートをはかないし、女性は女性のトイレに行くし、男性は男性のトイレに行くので、そんなところは一緒にならないのです。男と女が平等だという

のは、男と女が同じだという意味ではないではないですか。違うけれども平等でいられるのだという、一つのすごくいいモデルだと思う。

だけど、大人と子どもは違うのです。すごく違うと思います。子どもというのは、大人の小型ではない。だから、ぼくは子どもが嫌いなのです。4歳児、5歳児と話していると、「こいつら、全然人間と違うで」、ぼくらと全く発想が違うと思うのです。昔、うちの娘に「うさぎとかめ」の話をした。そのとき彼女は4歳になったぐらいかな。そして最後に「うさぎとかめとどっちがお利口？」と聞いたのです。そうしたら、「うさぎさんがお利口で、かめさんは悪い子」と言うのです。「どうして？」と聞いたら、「うさぎさんはよい子にお昼寝をしたけど、かめはずっと走っていたから」と言うのです。幼稚園では確かにそうです。お昼寝の時間に寝ない子は悪い子です。彼らは彼ら独特の考え方、独特の尺度があって、本当にぼくらと違う見方で世界を見ているのだなと感激してしまうけれど、でもやはり量り知れないです。

その人たちはぼくらと違うけれども、ぼくらが上で彼らが下かということにはならなので、全く違うように発想するけれども、やはり一個人として、人間としてその一生を一生懸命生きている人だなと、尊敬をしたいのです。その子どもたちを尊敬するということを学びたいのです。ぼくらは、子どもたちを尊敬すると考えたことがないのは、学んだことがないからです。でも、子どもたちを尊敬しないと、子どもたちに物を教えることができないと思う。ぼくらが彼らを対等の人間として尊敬し、彼らの人生を徹底的に尊重しようと決心するから、彼らはぼくらから学ぶ気になるのです。「おまえら、間違っている。何も知らん。おれが教えてやる」と言うと、彼らは学ぶ気にならない。それは、子どもの意識が変わったのです。彼らは、服従するという気は全くないのです。

なぜ、彼らが服従する気がないのかを、ぼくはよく分からないのですが、女性のアメリカのアドラーの先生が言うには、それは女が服従しなくなったから。昔は家の中で、お母さんはお父さんに、いつも服従のモデルを見せていたから、子どもはそうか、ああやって偉い人には服従するのだなと思ったけれど、このごろお母さんは全然服従しないから、どこにも服従している人のモデルがないのです。そうしたら子どもは、なぜ私が服従しないといけないのと思うだろう。それは当然です。ぼくもそう思う。

だから、昔のタイプの独裁主義的な独裁的な育児で、我々が決めて「ああしなさい、こうしなさい」と言っても、子どもたちは「はい、そうですか」と聞く気は全くないのです。自分たちで考えたいのです。それはとてもいいことです。自分たちで考えてもらいましょう。その手助けをするために今準備をしているのですが、子どもと大人とが平等で、ぼくたちが子どもたちを尊敬することを学び始めるところから取りかかろう。

これは、すぐ忘れるのです。我々はそんな育児やそんな教育を受けなかったから。うちの親は、私のことをかなり尊敬というか、一人前の人間として扱ってくれたなと思うのですが、中学の教師あたりが、どうも私のことをあまり尊敬していなかったのではあるまいかと、今にして思うのです。もしも生まれ変わるということがあって、死んでこの世にもう1回生まれたとしても、中学へ行くのは嫌だなと、ぐずぐず思っているのです。また尊敬しない教師たちと出会わないといけないでしょう。あれはやはりよくないと思う。学校の先生も、自分の子どもたちは尊敬すべきだと思うのです。

そうやって尊敬する子どもたちは、いつから尊敬すればいいか。それは生まれた瞬間から尊敬しないとしょうがないではないですか。3歳の誕生日からとか、15歳の誕生日というわけにはい

かないので、最初から、その子は独特の人間として、特有の人生を生きていくわけだから、生まれたときから尊敬してつきあいましょう。泣いても、おしめを替えないといけなくても、それは人間みんな通る道なのです。ぼくもそうだったのです。そこから、そのうちぼくらのおしめを替えてくれる人になるのですから、ひよっとしたら（笑）。尊敬してつきあいましょう。

そして、賞と罰のことを先ほど言ってみました。罰のほうが分かりやすいから、罰のほうから話をしたいのですが、子どもを罰するというのは、とても効果的な育児です。すぐ言うことを聞きますから。ぼく、何となく不登校の臨床を卒業後、30年間やることになってしまいました。本人はあまり望んでいなくて、神経症治療の専門家だと思い込んでいるのですが、周りは全然そう思っていないくて、昔からぼくのところへは不登校児ばかり来るのです。それで、不登校に結局、30年間つきあってしまうことになったのです。

例えば不登校というものを考えると、親がそこで皆すごく心配して、何とか学校へやりたいと思うのです。それでどうするかというと、大体、子どもの嫌がることをするのです。どんなことを言うかというと、「学校へ行かないと将来、大変だぞ」「おまえ、中学へ行かなくなって、高校も行けなくて、もちろん大学も行けなくて、大した仕事に就けなくて、ぶらぶらしていると嫁さんも来ないし、嫁さんが来ないと子どもも来ないし、そのまま暗い部屋の中で、むなしく一生を送ることになるぞ、分かってるか」と言うのです。あれ、効果的だと思いますか。そんなことを言って、子どもが「よし、行くぞ、学校へ」と思わないと思う。思わないけれど、もっと強烈にやれば思うのです。

例えば、小泉さんに陳情して、国が法律を変えまして、無断で不登校を3日以上した子は死刑（笑）。それで実際に、3人ぐらい、公開銃殺刑か何かにするのです。そうすると、日本じゅうの不登校児は大抵、学校へ行くと思う。殺されてはかなわないから。だから、罰というのは、徹底的にやれば、確かに効果的な育児ではある。けれども、副作用が大きすぎるのです。その効果と副作用は、やはり医者ですから考えまして、あんまり副作用が多いものは使えない。

副作用というのは、罰すると、親や教師のことが嫌いになるではないですか。「罰してもらってありがとう」と思うのは、スポ根漫画だけで、実際の子どもは思わない。普通、すなおな子は、ひどいことを言うと、親のことを嫌いになります。それで喜んでもっと罰してというのは、マゾヒズムといいまして、ちょっと医者にかからないといけませんから、普通、罰すると関係が悪くなって、相手のことを嫌いになるだろうと思います。あるいは、罰すると消極的になります。いっぱい罰をもらって、「勇気りんりん、虹（瑠璃）の色」にならないので、どちらかというとしょぼんとして、やる気を失って、何もしなければ怒られないで済むかいなぐらいのことを思いますから、積極的に出なくなります。

あるいは、これは家庭裁判所に勤めている時代につくづくと思ったのですが、非行少年の多くは、罰して育てられた子なのです。放任されて罰なしで育った子は、どちらかというとななくて、どちらかという、親もその子たちを嫌い、学校の先生も嫌い、事あるたびに罰して育てたタイプの子のほうが多いのです。その子たちが、万引きをやってみたり、暴行事件を起こしたり何かするではないですか。万引きをやった子に、なぜ万引きなどしたのだと言ったら、「見つからなければいいと思った」と言うのです。これは、罰せられた子の理屈です。罰せられるからやめようということは、罰せられないならやってもいいわけです。自分の心の中、自分の内部に道徳とか倫理の基準がないのです。怒られるか、怒られないかで、ものを決めるのです。だから、激しく罰して育てると、罰せられるかな、どうかたと周りのようすをうかがって、だれも見えないなという、やるわけです。だから、罰せられないとそれをやるというのも、一つの副作用だと思う。

それから、人を罰する人になる。体罰を加えて育てた子どもは、ほかの子に対して乱暴になったり、自分が大人になったとき、自分の子どもに体罰を加えるというのは、幾つかの研究があります。客観的なデータがありますので、そうなのだと思います。罰するということを学びますから。それらのことは、すごくまずいのではないかと思うのです。いつまでも人が人を罰する、特に体罰ということ罰するというのは、次の世代へ遺伝させていくだけではないですか。ぼくたちの子育てというのは、ぼくらが子どもを育てるだけではなくて、実は孫も育てているわけです。その子どもたちは、ぼくたちが育てられたやり方を学んで、それで子どもを育てますから、ぼくらが子どもを罰するということは、その子どもたちはまたその子どもを罰することを意味するわけです。アドラーが気にしていたのは、孫のこともあるけれども、世界を育てる、次の世代を育てるということです。

ぼくらの世界というのは、戦争があつて、今も戦争があります。それから犯罪があつて、あまりいい社会ではないと思います。戦争という方法で、国際問題を解決しないほうがいいです。それから、人が私にくれると言っていないものを、もらわないほうがいいです。それも暴力的にももらわないほうがいいです。あるいは、夫婦間でも親子間でも、暴力を振るって、問題解決するのをやめたほうがいいです。では、なぜジョージ・ブッシュは暴力でもってイラクへ攻めていこうとしたのか。なぜDVのお父ちゃんはお母ちゃんを殴るのか。なぜ銀行強盗はピストルをぶっ放すのかということ、親から学んだから。そういうやり方が効果的だということを、子ども時代に育児の中や教育の中で、学んだわけでしょう。

人間が生まれながらに暴力的かどうか、よく分からないのです。生まれながらの人間をだれも見ることがなく、皆その育児や教育を受けた人間しか見たことがありませんから、よく分からないのですが、どうも生まれながらに、そんなに暴力的ではなからうと、例えば人類学者たちは言います。考古学者たちも、縄文式時代はあまりけんかはなかったのだと言います。弥生式時代になって農耕が始まると、急に刀傷や矢の傷で死んだ人が増えるのだというから、本来、暴力的ではなくて、やはりそういう暴力というものを、教育をする。戦争前などは軍事教練といい、学校で体系的に暴力の方法を教えていたわけです。

暴力教育そのものが絶対的に悪いとは思わないです。というのは、私自身は、合気道という武道を10年ぐらいやったのです。結果的にすごくよかったなと思うのは、絶対暴力を振るわなくなった。相手がどんなに興奮して、私に殴りかかってきても、殴られればいいと思うようになった。その暴力を制御するために、とても役に立ったから、それはよかったです。だから、制御することが目的であれば、一切教えていけないとは言わない。でも、そうではなくて、人を威圧して支配するために暴力を使うことは、教えないほうがいいと思うのです。そうすると、その罰を使った育児や教育は、幾ら効果的でもやめておいたほうがいいのではないかと。不登校児を3日間ではなくす方法なんて、やめたほうがいいのではないかと思います。

では、罰しないで一体子どもが育てられるのか。アドラー心理学が考えたのは、一つは、話をしようということです。とにかく、子どもに納得をしてもらおう。理屈が立つことなら、人間は聞いてくれるだろう。だから、なぜそうしてはいけないのか、そうしたら困るのかを、子どもたちに分かってもらおうということです。それから、人間は話す力があるので、できるだけそのお話しする力でもって、子どもを育てたいのです。だから、「ちょっとお父さんの考えること聞いてくれる？」と言いたいのです。それで「いや、聞きたくない」。これは、親子関係が悪いのです。

提案したことを子どもが聞きたくないのは、基礎工事が悪いので、子どもをそもそも尊敬して育てていなかったのだと思います。だから、「聞いてくれる？」と言ったら、「聞きましょう」と

いう親子関係をまず作っておきたいのですが、そうやって「なんでそのようにしてほしくないか」という話をしたいわけです。例えば「夜遅くまで起きていてほしくないのは、あなたがたの健康のこともあります。若い子どもが 11 時、12 時に起きていて、朝 7 時に起きて学校へ行くと、寝不足になって学校で眠くないですか。それも困りますけれども、実は、お父さんとお母さんが夜中に仲良ししたいと思うこともあるかもしれず、君たちが起きていると、ちょっとじゃまになるかもしれず」と、うちは言いました。「早く寝ていただくほうがいいんです」と言ったら、「あ、そうですか」と言って子どもは寝ていましたが、いけないですね。いやいけないではないです。

だから、子どもが納得するような、「なるほどな」という話をしたいのです。また、子どもが納得しないようなことは、こちらのごり押しだから、ごり押しというか、我々のわがままも、人間ですから、ある程度は聞いてもらわないとね。これはこちらのわがままなだけけれど、このようにしてもらえるほうが、私はちょっとありがたいのだということは、そのように言いましょう。絶対的に正しいことだという顔をしないで。親だって人間で、好き嫌いがあるのですから。

例えばぼくとしては、ただのわがままですが、食事が終わると、なるべく早く片付けをしたいのです。机の上につまでも食器が残っているという状態が嫌なのです。なぜと聞かれると、趣味なのです。単なる好み。それ以上の深い根拠はないのです。そうなのだけれども、それをできるだけ家族に納得してもらいたいのです。他人の食器まで干渉するのは、まことにどうかと思うのです。どうかと思うのですが、私としては、「食事が終わりました。全員終わると、テーブルの上に何にもなくなって、きれいにふきんでふきました。ああ、よかったと、こういう生活を送りたいと思うのですが、協力してもらえませんか」と言いたいのです。子どもは、これはお父さんの個人的な生き方というか、美意識というか、わがままの問題で、それは聞いてあげてもいいなと思えば聞いてくれる。そこを、「片付けんか、おまえは。何してんだ」と言うと、かわいくない親になるでしょう。対等の人間として協力的に生きるためには、話し合うこと。いろいろな形で話し合うというトレーニングを、ぼくらが積んでいかないといけない。賢い親にならないといけない。

一つ、罰の代わりにすることは、話し合うこと。もう一つ罰の代わりにすることは、話し合わないこと（笑）。話し合わないことというのは、例えば夜遅くまで起きているのなら、一応一ぺん言ったとする。「あまり遅くまで起きていると、朝なかなか起きられないじゃありませんか。だから、10 時ぐらいに寝たほうがいいんじゃないですか」「はい」と言っていて、また 2～3 日したら遅くまで起きているとしましょう。そうしたら、もう話し合わないで、一ぺんようすを見よう。こちらはもうほうっておいて、先に寝よう。そうすると、朝起きにくいかもしれないではないですか。朝起きにくいことから、学ぶかもしれない。やはりあそこまで起きていると、ちょっと起きにくいなと子どもが学んでくれたら、子どもが自分で工夫するようになるかもしれないではないですか。

この世界には、人間の欲しいままにならないものが、いくつかあります。一つは、自然の法則。自然の法則というのは、ぼくらがどんなに願っても曲がらないので、自然の法則なのです。やはり夜 11 時、12 時まで起きていると、朝なかなか起きられない。これは自然の法則で、しょうがないのです。お勉強を全然しないで試験を受けると、成績が悪い。これも自然の法則です。お勉強を全然しなくて、朝 1 錠ずつ錠剤を飲むと、その中に英語の単語が 20 個ずつ入っていて賢くなるというのですが、そうはいかないのです。コツコツと勉強すると賢くなる。こういう自然の法則には人間は逆らえないので、自然の法則を知らなければいけない。勉強すれば成績は上がる

し、勉強しないと下がる。早く寝れば朝気持ちよく起きられるし、遅くまで起きていると、なかなか起きられないというたぐいのことを、子どもたちは学ばなければいけない。それを親が、あまり学ぶじゃまをしすぎるのは、よくないと思います。だから、子どもたちが自分で自分の管理ができるように、自分で学んでもらう。

もう一つ我々の欲しいままにならないのは、社会的な法則です。例えば法律というのは、ぼくらの勝手に変えられないのです。それと同じように、例えば家の中のルールというのも、ちゃんと決められたルールなら、個人が勝手に変えられないではないですか。ちゃんと決められたルールを持ちたいのです。子どもも納得するような筋の通ったルールです。みんなが参加して決めたルール。それから、不平等なく、みんなが従わなければいけないルール。この三つの要件というポイントが大切なのです。「一つは、民主的にみんなが参加していること」「一つは合理的でみんなが納得すること」「一つは平等でみんながそのルールに縛られること」というルールがあれば、それは守られなければならないと思います。もしも守らないことがあると、その守らないことについて、どうすればいいか話し合わないといけないと思うのです。

だから、その二つのこと、自然の法則と社会の法則を、罰の代わりに子どもたちに学んでもらうチャンスを作っていきたいのです。そこであまり手かげんをして、例えばルールはそうなのだけれど、かわいそうだから今回例外という、子どもたちにルールは破ってもいいと教えているのと一緒ではないですか。

これは小さい子ではないですが、ある女子大で、カンニング事件があったのです。それで、その大学の規則では、退学まではならないのですが、その学年の全科目が0点なのだそうです。だから、完全に留年して、翌年全部の単位を取り直さないといけない。教授会でそれが話題になりまして、全科目0点ですと説明したら、教授たちがかわいそうだと言うのです。あの子はふだんまじめにやっているし、たまたま出来心か何かでカンニングをして、その科目0点はしょうがない。けれども、全科目まではかわいそうだったのです。そうしたら、そのアドラー心理学を学んでいる教授がおりまして、それはおかしい。それだったらルールを変えなさい。ルールが全科目0点なら、全科目0点にきなさい。そうでないと、アナーキズムだと言ったわけです。

ぼくもそう思うのです。ルールが不合理なら、ルールを変えればいいけれども、ルールをそのままに置いて、憲法第9条をあのままに自衛隊、あれはいけないと思うのです(笑)。ぼくは別に憲法改正論者ではないですが、そのルールどおりに動いてほしい。日本人がああ憲法9条に関して、あのように柔軟な解釈ができるのは、やはり家庭内のルールや学校のルールが、変幻自在に適用されてきた育児と教育の成果ではあるまいかと思うのです。それでは、やはりまずいのではないかと。きちんと社会の法則を子どもたちに学んでもらいたい。これが罰に代わるぼくらの提案です。話し合うことと、いろいろな形で結末を子どもたちに体験してもらおう。

例えば庭にアシナガバチという蜂が巣を作ったのです。蜂はきれいでしょう。小さい子どもは触りたがります。うちの子どもが触りに行ったら、ぼくはどうしようかなと思ったけれども、これは刺されてもらおうと思ったのです。というのは、もしもそこで止めてしまうと、せつかく面白いおもちゃを触ろうと思ったのに、お父さんは意地悪だと思われるかもしれないし、お父さんのいないときに触ろうと思うかもしれない。「蜂は刺すと痛いよ」と言い聞かせても、そんなの、子どもは実感ない。だから、一ぺん刺されようと思って見ていたら、やはり刺されました。

それで行って、処置をして、「痛かったね、どうしたの」「虫さんが刺した」「ああ、あの虫は刺すんだよ。次からどうする」と聞いたら、「もう触らない」と言ったのです。そのとき、お父

さんはいい役だと思いませんか。子どもが痛い目にあったときに、助けに出てくるスーパーマンに見えるではないですか。先ほどの、「だめ、あれ触っちゃ」と言っている意地悪なお父さんと違って。これがぼくらの言う「結末から学んでもらう」ことなのです。

これは親はすごく勇気が要ります。アイロンにちょっと触ってもらう、蜂に触ってもらうぐらいはやってもらうかもしれないです。ただ、子ども自身に致命的な影響があることはしてもらえません。幼稚園ぐらいの子どもに、道路の真ん中で遊んでいたら車が来てひかれて、結末から学ぶでしょうと思わないです。子ども自身に、致命的な影響があるときは止めるでしょう。それから、ほかの子に致命的な影響があるときも、止めるでしょう。いすで殴りかかったりしたら、止めます。止めるときも、別に興奮して止めなくてもいいと思うのです。「何するの！」と言わなくても、ただ抱いてこちらへつれてきて、暴れていようが何しようが、こちらがにこにこしていれば、それでいいわけで、子どもに不愉快な目にあわせることでもって教育するやり方を、やめたいのです。これも、親のがわに、かなり訓練が要るのです。すぐ感情でもってアクセントをつけて、気迫を入れて子育てしたいのです。あまり気迫を込めすぎますと、子どもがおびえますから、そんなに気迫を込めないで育てたいのです。

これで、一つは尊敬や平等性の話をしました。それから罰をやめる話をしました。最後は賞の話をします。

褒めて育てようというのが、一時はやりました。今もはやっているかは知りませんが、子どもを、「よくやった。頑張った。偉い偉い。わーっ」と言って育てなさいという人がいるのです。それも効果的な育児です。罰を使った育児も大変、即効性があるけれども、賞を使った育児もなかなか即効性がありますが、やはり副作用があると思います。

一つは、賞をくれないと、やらない。本当に子どもはすぐ言うようになります。「勉強しなさい」「幾らくれる？」と。それを言われてしまったら、「何のために勉強するのか、あんた、分かってないじゃない。お金を稼ぐためではないでしょう」と思いたくなるではないですか。だから、その賞をもらうことが、すべての行動の目的になってしまうのは、もう一つよくないのではないか。確かにぼくらは社会に出たら、お金を稼ぐために働くと言うかもしれないけれども、お金を稼ぐために働くという考え方も、ちょっと貧しくないかなと思うのです。

これも思春期の、例えば高校生、大学生をよくカウンセリングするときに、就職に関係した話になります。それで、何のために働くかということを知りたいのです。あなたはどんな仕事をしたいか。何のためにその仕事をしたいか。そのお金を稼ぐためという答えは貧しい。結局、人の役に立つために仕事をするのです。私今日こうやってお話しているのは、金を稼ぐためかもしれない。かもしれないけれども、皆さんがたにお話を持って帰ってもらいたいわけですから。その話をもち帰ってもらおうと、ひよっとしたらこの世のために、ちょっとは役に立ったことになるかもしれない。

私の役に立ったことになるかもしれないけれども、今日の昼、私は、その元町の駅前のミスタードーナツで、ドーナツとコーヒーを食べました。ミスタードーナツの店員さんは、私の役に立ってくれました。私に、ドーナツとコーヒーを売ってくれましたから。もし、あそこにミスタードーナツがないと、私はドーナツとコーヒーを食べられませんでした。電車は、私をここまで運んでくれましたから、電車も私の役に立ってくれました。そうやって、人間がほかの人たちが、

より一層快適にというか、便利に生きられるように、みんなが働きあうわけです。これがアドラー心理学が持っている社会のイメージなのです。

その中で、自分はどのパートを受け持とうかなと思う。オーケストラの一つの楽器のように、あるパートを受け持ちたいのです。ですから、お金というのが副次的に入ってくるかもしれないけれども、お金そのものが目的で労働するわけではないのではないかと。そのほうが何となく、幻想かもしれないけれども、生きている意味があるではないですか。ただ金を稼ぐためだけというと、何かどんな汚いことも、しそうな感じもするではないですか。だから、小さいときからそういう感覚を、子どもたちにやはり植えつけていきたい。そうすると、お勉強したら、あれ買ってあげようとか、幾らお金をあげようというのは、やはりまずい育児ではないかと思えます。

それから、褒めてもらえない、お金がもらえない、あるいはお褒めの言葉が来ないとなると、行動が消える。これも心理学者が皆、すぐ言うことですが、強化がないと行動が消去される。昔、保育所や幼稚園で、ぼくらはオペラント・シールというのですが、ひまわりマークのシールか何か張ってくれるのです。朝ちゃんと遅刻せずに来たり、手をちゃんと洗いました、お昼寝をしましたというシールをくれるのです。子どもたちはそのシールが欲しいものだから、「わー」と言っていて、いい子になるのです。保育室はとても平穩無事に動くのですが、小学校へ入った途端にシールが来なくなるのです。たちまちアナーキーになるわけです。シールが来ないではないか。それなら、朝ちゃんと来ることないのではないかと子どもは思うわけでしょう。では、小学校でもシールを導入すればいいけれど、中学もシールか、高校もシールか。そうはいかないでしょう。だから、いつかそういう賞はなくなるのです。だとしたら、この育児のやり方はまずいのではないかと。あるいは、中学はシールをやめて、1回100円、高校へ行くと1000円など、どんどんエスカレートして、インフレを起こす。3歳の子どもはあめ玉1個で釣れるけれど、高校生を動かそうと思うとバイク1台要りますから、それもまずい育児だと思うのです。だから、やはり賞を使うのもやめたいと思えます。

なぜ、賞をそんなにぼくらが嫌がるかというと、賞というのは結局、独裁的なのだということです。ぼくらがよいか悪いかを判断して、よい者に賞を与えて、悪い者に罰を与えるという、その独裁的な育児の構造から出てきているから。独裁的ということは、要するに、ぼくらが上で彼らが下。大人が支配者で子どもが被支配者という構造から出てきている。

これは、夫婦関係に例えるとすごくよく分かるのです。いつもする話ですが、奥さんが一生懸命おいしいものを作って待っていると、ご主人が帰ってきて、「今日ごちそうだね」と言うのです。「偉いね。本当に頑張ったね。君だってできるじゃないか。これからもしっかり頑張るんだよ」と言ったら、大体の奥さんは怒るのです。「そんな言い方ないでしょう」と。子どもが学校でいい成績を取って帰ってくると、「よかったね。頑張ったね。君だってやればできるじゃないか。これからも頑張るんだよ」と言うのです。今の子どもは、「なんで親にそんなことを言われんといかんねん」と怒っているのです。昔の子どもは喜んだのです。昔の子どもは、親は上で自分は下と思っていたから。

なぜこの言い方が嫌かということ、明らかに、例えば「偉いね、頑張ったね」と言っているご主人は、奥さんよりも上の立場を取っていて、ほめてつかわしているではないですか。これが、その賞をぼくたちが嫌がる、いちばん大きな理由なのです。本当は、子どもが何かをしてくれることが、ぼくらの助けになっているから、助けになっていることに感謝をしないといけないと思うのです。人間というのは、共同生活をしていく中で、みんなが助け合わないと生きていけない生

物なのです。世の中には、助け合わなくても生きていける生物もいます。マンボウという魚がいて、ぼーっと一人で浮かんでいるのですが、普通、あれは助け合っているようには見えません。そんなものもいるけれども、人間はそうではなくて、みんなが協力しあって、いろいろなことをやっていかないといけない。

例えば私は、テーブルが食事のあときれいになっているのが好きだから、「何とかきれいにしてよね」と言ったら、子どもが「はい」と言って次の日から運んでいってくれて、テーブルがきれいになったとするではないですか。ここで黙っていてはいけませんので、協力してくれたのだから、「すごくきれいになってものすごくうれしい」「私の願いを聞いてくれてありがとう」と言いたいのです。やってくれて当たり前だと思わないのです。そのやってくれたことに、いつも感謝しながら暮らしていきたいのです。だから、その適切な行動、子どもがよいことをしてくれたときに、必ずそれに対して何か反応したいのです。

そうしないと、子どもは親からエネルギーをもらえないので、きっとそのうち不適切な行動で注目を引くことをやるに違いない。親はちっともぼくのほうを向いてくれない。「よし、こっち向けてやる」というと、何か悪いことをするように思いませんか。妹をいじめるとか、猫を踏む。すると親はこちらを向いて「こらっ」と言うではないですか。すると、「こっち向いた」と思うでしょう。ああなるのは、結局ふだんの適切なほうに、ぼくらがしっかり注目していないからだと思うのです。だから、お片付けしてくれる、掃除をする、早く寝る、「おふろよ」と言ってすぐ入ったときに、すかさずコメントしておきたいのです。「助かる。先入ってくれてありがとう」と。

では、学校の成績がよかったらどうするか。学校の成績がいいのは、親はあまり助からないのです。塾へ行かなくて済むから、幾らか助かるかもしれないけれども、あれは子どもの人生の問題と違いますか。学校でどんな科目にどんな点数を取るか、どういう学校へ進学するか。あるいはどんな友達とつきあうか。あるいはどんな異性と結婚するかとかいうのは、我々に影響があるにしても、基本的には子どもの人生の問題で、子どもが自分で考え、自分で選んでいくべきことだろうと思うのです。いい成績だったとしても悪い成績だったとしても、それで直接ぼくらに何か利益があったり、不利益があったりあまりしないから、これは「ありがとう」の問題ではない。「95点、ありがとう」「何がありがたいの、お父さん」と言われるではないですか。ありがたくはないのです。そのときに「頑張ったね」と言うと、罰になってよくない。

では、どうするかというと、ぼくは何も言わないことにしました。子どもの成績は子どもの課題で、子どもが、例えばもっと勉強したいから、塾へやってくれと言う。子どもが頼んでくれば、塾へやりましょう。でも、こちらから、「あんた、ちょっと成績上げるために塾へ行ったほうがいいんじゃない？」というのは、うちの場合はやめておこうかなと思いました。あまり塾へ行ってかさ上げして、いい学校へ行きますと、行ってからしんどいだろうと思いました。それから、子どもが自分でその勉強のために何か相談してくれば、いくらでも応援するけれど、こちらから子どもの成績にどうこう言うのはやめようと思いました。

面白いのは、娘の一人が、あるとき言うのです。「お父さん、よそのうちでは、成績が悪いとしかられるんだって」。こういう育ち方をしたか。大体、よその家ではしかられるのです。残念ながら私の力が足りず、アドラー心理学の普及がもう一つなので、しかられるのですが、成績が悪いからしかる、成績がよいから褒めるというのは、ちょっとどうか。ぼくはあまり賛成しない育て方で、子どもは、いい成績だったら、すでにそれでいい成績という形の賞をもらっているで

はないですか。悪い成績だったら、それで罰をもらってがっかりしているのではないですか。ぼくらは何も、その上に追い打ちをかけることはなかろうと思いました。それよりも、将来どんな人になりたいのか、この社会の中のどんな役割を取りたいのかについて、たくさん話をしたい。それでもしもそれが、子どもたちの夢が、勉強をしないとかなえられないものであれば、例えば医者になると言ったら、医学部へ行かないとしょうがないわけです。医学部へ行くのだったら、それなりに勉強しないとしょうがないわけで、そうすると子どもは勉強するだろう。医者になるということを本気で思うなら勉強するし、思わないなら、そんなにしないだろう。それはそれでよろしいと、基本的に考えました。

そうやって、私自身は子どもたちを育ててきました。それから、ほかの人たちにもお勧めをして、育ててもらいました。なぜアドラー心理学の育児を、そのように自分でもやったし、人にもお勧めしたかという、実は、これは古いタイプの育児だからなのです。育児の理論としては、アドラーという人が亡くなったのが 1937 年で、もう 50 年以上前になるのです。そのアドラー自身も、この子育てをしたのです。1982 年に、ウィーンで国際アドラー心理学会がありました。私は、そこへ行きました。そのときに、クルトというアドラーの息子さんと会ったのです。

クルトは、いすを運んでいるのです。その会場の設営をする、いすを運んでいるおじいちゃんがいるから、「あれ、だれ？」と聞いたら、「あれ、クルト」と言う。「クルトって、クルト・アドラー？」「そう」。アドラーの息子がいすを運ぶかと思って、それから紹介してもらったのです。「どこから来た」と言われて、「日本から来た。アドラー心理学を今ちょうど勉強をしているところです」「それはとてもうれしいから、あとで喫茶店へ行こう」と言いまして、それでウィーンの喫茶店は、路上にあるのです。道の上にテーブルがあって。そこへ行って、ザッハトルテか何か食べながら。ウィーンにはウイナコーヒーはないのです。コーヒーはみんなウイナコーヒーですから、それでコーヒーを飲んで話をしていたのですが、彼を見て、「ああ、そうか」と思いました。アドラーの育児をすると、こんな人になるのだと思ったのです。これは「仕上がり 1」です。

あと、いろいろな人たちの子どもたちと会ったのです。アドラーの先生たちの子どもたちと会うと、なかなかよく仕上がっている。そんなものすごい天才的かというと、すごい社会的に優れた人にもならないし、逆に落ちこぼれた人にもならないし、よい市民に育てているなという感じがしたのです。これはいいなと、ぼくは思ったのです。やはり実験の結果がいちばん信用できるのではないですか。ぼくらが頭で考えてこうだろうと思うことよりも、実際やってみた結果、こうだったということを信用するのが自然科学者というもので、私も一応、自然科学教育を受けたから、実験結果がこれならよかろうと思いました。

それで、日本でも 20 年ほど、アドラー心理学の子育てをしているわけです。最初のころに学んだ人は、もう 20 年めぐらいになります。大体みんな、生焼け状態で来るのです。悪い子育て、多くの場合はファシズム型、独裁型の子育てをして、子どもに背かれて青くなって来る。あまり多くないけれども、放任型子育てをしていて、子どもが上げ下げならないようになってから来るから、途中出発が多いので、最後かんぺきには仕上がっていないのです。お料理と一緒に、最初に変なものをたくさん入れてしまったりすると、最後仕上がったものがもう一つになる。お客様にちゃんと出せるところへ何とかごまかしたけれど、高級レストランでは出せなくなるかもしれない。でも、アドラーがなかったら大変だったと思う。

自分自身についても思います。私自身も、アドラー心理学を学んだのは、3 人の子どもができ

てしまって、いちばん上の子どもが小学校を出ようかというぐらいのころでしたから、途中出発なのです。ちゃんと育児というものを学んでいなかったら、それはすごい大変だったろうと思います。特に思春期。うちは、アドラーのおかげで、いわゆる思春期がなかった。彼らは、彼らの意見をいつもはっきり言いました。自分の人生を彼らなりに決めました。そんなのは当たり前だと、ぼくらは思ったのです。アドラー心理学をやっているのだから、子どもがどこの学校へ行こうが、どんな友達とつきあおうが、それは子どもたちの課題でしょう。社会に対して、きちんと責任取ってくれること、家族に対して責任取ってくれることさえしていれば、最初に言った、放任育児のしつけを受けていない子ではなくて、すべきことはちゃんと知っていて、してはいけないことはしない子であれば、あとは彼らが自分の人生として、自分で責任を持って選ぶことだろうと思った。だから、思春期の中に彼らはたくさんの選択をしまして、親は反対しませんでした。だから、いわゆる思春期のかっとうは、すごく少なかったのです。ずっと仲良しで思春期を通り越せたのは、本当にアドラー心理学のおかげだなと思うのです。

あれでちょっとぼくらがいじめていたら、我々の意見、古くさい親の意見を子どもに押しつけて、「あしなさい、こうしなさい」「あれはいけません、これはいけません」と強圧的に言っていたら、お父さんのパンツは臭いと言って、割りばしでつままれて、洗濯機へほうり込まれるはめにきつとなっていたのです。そんなことになっていないのは、アドラーのおかげだなと思います。

皆さんがたにもぜひ、その育児というものを「学んで」いただきたいのです。「育児なんか、私もされたことがあるから、できます」というのも変な話で、そんなのは、「盲腸の手術をされたことがありますから、他人にもできます」というのと同じぐらい、変な話です。育児というのは、今やとても難しい技術なのです。昔は、世の中が固定していたから、我々のしていた仕事を、子どもたちがする。我々がつきあった範囲の人と、子どもたちもつきあう。我々が住んでいる地域に、子どもたちも住むというのが前提でやっていたから、だから育児というのは、そんなに難しくなかったのです。でも今や、どんどん変わっていく世の中で、子どもたちもどこで住むか分からず、どんな職業に就くか分からず、どんな人とつきあうか分からない。そこへ送り出していかなければいけないわけではないですか。

育児というのは、学ばなければいけない技術になったと思うのです。ある程度の月謝を払って学んでいただいたほうが、お得ではないかと思っているのです。だって、自動車の運転免許は高い金を払ったでしょう。自動車よりも、子どものほうが運転が難しいです。自動車ほど払えとは言わないけれども、本を読み、育児の勉強会も出ていただけるといいかなと思っています。

平成 16 年 2 月 10 日

第 42 回 兵庫県精神保健大会における講演より

更新履歴

2013 年 2 月 1 日 アドレリアン掲載号より転載